【13】

氏　　名	堀（ほり）　博文（ひろふみ）
学位(専攻分野)	博　士　（文　学）
学位記番号	文　博　第 151 号
学位授与の日付	平成 12 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学（言語学）専攻
学位論文題目	A Morphological Study of Skidegate Haida （ハイダ語スキドゲイト方言の形態論的研究）
論文調査委員	（主査）教授 宮岡伯人　教授 庄垣内正弘　教授 吉田和彦

論文内容の要旨

ハイダ語は，アメリカ・インディアン諸語の一つで，アメリカ合衆国アラスカ州南東部ならびにカナダのブリティッシュ・コロンビア州北西部で話される，系統不明の言語である。その話者は，専ら少数の高齢者に限られていることから，近いうちに消滅する可能性が極めて高いと予想されている。

本論文は，ハイダ語のいくつかある方言のうち，カナダのブリティッシュ・コロンビア州クィーン・シャーロット諸島で話されるハイダ語スキドゲイト方言の形態法に関わる諸問題を扱いつつ，その概観を示すことを目的とするものである。本論文に示されたハイダ語の資料は，論者が 1991 年から 1999 年までの毎年平均一ケ月半から二ケ月に及ぶ現地調査において，七名の話者（男性三名，女性四名，主に 70 ～ 80 歳代）から得たものがその主要な部分を占める。本論文の各章の概要は，以下の如くである。

第一章では，分布，話者数，方言区分，系統など，ハイダ語の概要を述べ，更に，これまでのハイダ語の研究史を概観した上で，ハイダ語研究における本論文の位置付けや意義を示す。

第二章では，ハイダ語の音韻論，なかでも先行研究において十分な議論がなされてこなかった声調に焦点を当て，単純語だけでなく，合成語や派生語におけるその現われを詳細に検討し，ハイダ語の声調の現われは，音節構造と形態法により予測可能であると結論付ける。ハイダ語には，音声的に高，中，低の 3 段階の声調がある。高声調は，CVV（C）（V は母音，C は子音を表わす）あるいは VR（C）（R は自鳴音を表わす）構造を有する音節に現われ，中声調は，CV（O）（O は阻害音を表わす）構造を有し，かつ，高声調に後続する音節に現われる。低声調は，中声調と同じく，CV（O）構造をもつ音節に現われるが，語根の第一音節，接頭辞である場合に限られる（中声調は，これらの環境では現われない）。また，CV 構造の場合は，その母音が長母音として実現する（但し，中舌母音の場合は，長母音として実現しない）。中声調と低声調は，同じ構造の音節が後続する場合には，それらの音節も同じ声調を担う。また，高声調は，文末など主な休止の前にある音節の場合，一定の条件により，中声調もしくは低声調になる。こうした事実から，ハイダ語の声調は，高声調連結規則，中声調連結規則，低声調連結規則，高声調抑制規則を設定することにより，その音声的実現を導くことができる。

続く第三章と第四章では，ハイダ語の形態論を扱う。ハイダ語の語類は，名詞，代名詞，動詞，更に，名詞に附属して，方向や場所などの斜格的概念を表わす後置詞，副詞的な概念を表わす不変化詞に分けられ，本論文では，名詞と動詞について詳述する。

ハイダ語の形態統語法は，言語類型論的にみると，以下のように特徴付けることができる。まず，語の統合度という観点からいえば，一つの語に比較的多くの形態素が含まれ，語が複雑な構造をなす。ついで，形態素間の融合度という観点からすれば，形態素間の境界が比較的明瞭で，なおかつ，形式と機能がほぼ一対一で対応しているという点で，膠着的なタイプの言語であるといえる。また，文中における名詞や動詞には，それらの統語的関係を示す標識がなく，その点からすれば，孤立的なタイプの言語であると見做し得る。

第三章では，ハイダ語の名詞の形態論と所有句構造を扱う。ハイダ語の名詞は，限定接尾辞をとるか，あるいは，一定の接辞を伴って所有句構造をなすことができるものと定義される。名詞に関わる形態的手法は，接辞法と合成法である。合成法は，構成する語根の語類により，名詞＋名詞タイプ，動詞＋名詞タイプ，名詞＋動詞タイプの三つに分けることができるが，いずれも散発的にみられる程度である。一方，派生に関わる接辞は，専ら接尾辞に限られ，機能の点から，語根を修飾するタイプと語根の文法範疇を変換するタイプの二つに分けることができる。

ハイダ語の所有句は，被所有者名詞の意味特徴によって，譲渡不可能所有と譲渡可能所有の二種類の構造に分けられる。前者は，身体部位名称，親族名称，全体・部分関係を表わす名詞が含まれ，後者は，それら以外を表わす名詞である。更に，ハイダ語の所有句構造を所有関係の標示の型からみると，譲渡不可能所有構造，とりわけ被所有者名詞が親族名称の場合は，所有関係の標識が主要部である被所有者名詞に付加される主要部標示型を示すのに対し，譲渡可能所有構造の場合は，標識が従属部である所有者名詞に付加される従属部標示型を示すという点が特徴としてあげられる。

第四章では，動詞の形態法を扱う。ハイダ語の動詞には，形容詞的概念（「大きい」「小さい」「高い」「低い」など）を表わす語ばかりでなく，数詞も含まれる。ハイダ語における語彙的特徴の一つとして，人間を表わす語（「人」「男」「女」「子供」など）や社会における機能的範疇を表わす語（「チーフ」「奴隷」「魔女」など）は，名詞ではなく，本質的に動詞であるという点があげられる。

ハイダ語の動詞は，語根に随意的な接頭辞と派生接尾辞，更に義務的な屈折語尾（接尾辞）が付加されることによって構成される。語根は，まず形態的振る舞いから，拘束語根と自由語根に分類することができる。前者は，手段接頭辞と類別接頭辞のいずれかあるいは両方が必ず付加されるもので，それらの接頭辞を伴わずに使われることはない。一方，後者は，それらの接頭辞が付加されなくても使われ得るものである（手段接頭辞を伴う自由語根が一部あるが，類別接頭辞を伴うことは決してない）。

他方，動詞語根を他動性の観点から分類すると，後置詞を伴わない名詞項を二つ要求する他動詞と後置詞を伴わない名詞項を一つ要求する自動詞があり，更に，その中間として，二つある名詞項のうちの一つが後置詞を伴って現われる動詞がある。そのような中間的動詞とともに現われる後置詞には，いくつか種類があり，それに応じて，動詞を分類することが可能である。

動詞の形態的手法には，合成法と接辞法がある。合成法は，それに関与する語根の種類が限られており，生産性はさほど高くなく，最大限三つの語根の合成が可能である。合成法を語根の間の意味関係によって分類するならば，合成語の第一語根が手段あるいは動作の様式を表わすもの，第二語根が第一語根の示す動作の結果を表わすもの，そして，第二語根が第一語根を修飾するものの三つのタイプが認められる。

ハイダ語の動詞の形態法で，より広範にみられ，生産性が高いのは，接辞法である。接辞には，接頭辞と接尾辞があり，接尾辞の方が種類の点で接頭辞よりも多く，また一つの語根に付加される接辞の数も接尾辞の方が優勢である。従って，ハイダ語は基本的に接尾辞型の言語であると見做すことができよう。

接頭辞には，使役，手段，類別，自動詞化の四種類の接頭辞がある。そのうち，使役接頭辞は，他の三種類の接頭辞と共起することができるのに対し，自動詞化接頭辞は，手段接頭辞や類別接頭辞と共起し得ない。これらの接頭辞のうち，ハイダ語に特徴的であるとみられるのは，手段接頭辞と類別接頭辞である。

手段接頭辞は，動作で用いられる道具あるいは動作の様式を表わす要素である。道具を表わす手段接頭辞には，身体部位を表わすものが多く，語源的には，意味的に対応する自立名詞と形式上の類似が見出されるものがあり，それらの点で，ことによると名詞抱合との関連を示唆すると見做し得るかもしれない。一方，動作の様式を表わす手段接頭辞には，意味的に対応する自立動詞と形式上の類似が認められるものがあり，ときには，両者の峻別が難しいという点で合成動詞との関連を指摘できるかもしれない。手段接頭辞の形態統語的特徴としては，その付加により，動詞の結合価を増やすという点があげられる。この場合，一項動詞から二項動詞を派生するものに限られ，二項動詞から三項動詞を派生する例は得られていない。しかし，手段接頭辞の付加による結合価の増加は，常に起きるというわけではなく，その付加によっても，動詞の結合価に何ら影響を与えない場合も観察される。

類別接頭辞は，動詞と統語的に関係のある名詞項，即ち，自動詞の主語あるいは他動詞の目的語の意味範疇（主に形状，材質，機能など）を示す要素である。類別接頭辞を伴うことのできる動詞は，上述の拘束語根に限られる。ハイダ語におけ

る名詞類別は，一般的に一つの名詞が一つの類別範疇とのみ結び付くという名詞クラスとは区別されるべきものであり，実際，類別の対象となる名詞がどのような範疇のものと話者が捉えるかによって，異なった類別接頭辞が使われることがある。しかし，類別接頭辞のこのような細かい区別は，廃れてしまいつつあり，その使用は限られてきているようである。

接尾辞には，大きく分けて派生接尾辞と屈折語尾の二種類がある。前者には，動詞の意味を修飾するもの（修飾型）とその機能を拡張するもの（機能拡張型）があり，後者は，主に時制やアスペクトなどの概念を表わし，動詞に義務的に付加される要素である。

修飾型派生接尾辞には，方向を表わすもの（例えば，「～の中へ」「下へ」「上へ」など），語根を修飾するもの（例えば，「とても」「～になる」など），単数と複数の区別を標示するものがある。一方の機能拡張型には，中動態に相当する語幹を形成する接尾辞や使役接尾辞があり，いずれも動詞の結合価に影響を与えるものである。これらの派生接尾辞は，その現われる位置により，六つの類に分けることができる。

屈折語尾は，時制やアスペクト，更に，同一文中における三人称代名詞の複数性，否定，証拠性といった文法的な概念を表わす要素である。語尾も同様に，その現われる位置によって，六つの類に分けることができる。但し，一部の語尾の中には，話者によって，承接順序が異なることがあり得る。

論文審査の結果の要旨

北アメリカ北西海岸地域で話されるハイダ語は，系統的には孤立しており，話者数は二百名に満たない，消滅の危機が迫った言語である。本論文は，そのスキドゲイト方言を対象とし，この言語を母語とする最後の世代である高齢者から九年間のフィールド調査で得た資料をもとに形態論の包括的な記述をめざしたものである。

本論文と同じ方言を扱った研究は過去にもないわけではない。スワントン（John R. Swanton）による1900年代初頭の概説は，ハイダ語の初の言語学的な記述であり，おそらく今日ではもはや聞き出しえないような情報を多く含んでいる点で今なお価値をもつものであるが，音声表記は十分に信頼できるものではなく，形態論の記述にも多くの誤謬が含まれている。1970年代に出たレヴィン（Robert D. Levine）の記述は，スワントンのものに比べて格段の精確さを示しているものの，音声面では声調と母音の長短の扱いについて問題を残し，形態法ではハイダ語の重要な特徴である所有句構造や動詞に付加される手段接頭辞などに詳細な扱いが欠けていた。

本論文はこうした状況をふまえ，過去の諸研究の不備を補完しつつ，ハイダ語の形態論の全体像を整合的に描きだすことを目的としている。四章からなり，第一章でハイダ語の現況と過去の研究を，第二章で音韻論を概観した後，第三章では名詞の形態論，第四章では動詞の形態論を詳細に記述している。

ハイダ語音韻論の重要な問題の一つは声調である。論者は音声的に三段階が区別できるとするこの言語の声調が音節構造と形態法の情報によって予測可能であることを見出し，その音声的実現を導く音韻規則を提案している。声調が音節構造のような音韻的条件のみならず，形態的条件とも関わりを有するという事実を明らかにしえた点はまず評価されなければならない。ただ，論者自身も気づいているように，一部の形態素に特異な声調の実現や後置詞などの附属語における声調の振る舞いについては，更なる調査と考察が必要とされよう。

第三章では，名詞の形態法に関わる手法として接辞法と合成法を概観し，更に，名詞の形態統語法に関わる事象として所有句構造を詳細に記述している。特にハイダ語の所有句構造は，近年多くの言語で報告されつつある譲渡可能所有と譲渡不可能所有の区別をもつが，これまでいずれのハイダ語方言でも必ずしも十分な関心が寄せられることもなく，まして十分な記述がなされることはなかった。近年，リア（Jeff Leer）により，迂言的所有句構造を一つの特徴とした，ハイダ語そして近隣のアリュート語やイーヤック語を含む「北部北西海岸言語領域」という注目すべき提唱がなされているが，本論文におけるハイダ語の所有句構造の記述は，この言語領域説に影響をおよぼす価値ある材料を提供するものといえよう。

第四章の動詞の形態法は，本論文の主要部となっている。ハイダ語は，名詞よりも動詞にはるかに多くの情報を盛りこむ言語であることからくる当然の扱いである。動詞的接辞の種類は豊富であり，一つの動詞に生じうる接辞の数は多い。とりわけハイダ語に特徴的で，一般言語学的にも様々な問題を提供すると思われるのは手段接頭辞と類別接頭辞である。いずれも先行研究のなかでの扱いがないわけではないが，その一覧をあげるにとどまり，形態統語論上の特徴や振る舞いの細部を論じるには至っていない。

論者は，手段接頭辞の厳選された実例をとおして，意味的には身体名称を表わすものが多いことにくわえて，形態統語的にはその付加によって動詞の結合価を増やすものがある点など，重要な新知見を提出している。他方，類別接頭辞については，一つの名詞がある類別範疇と排他的に結び付いたいわゆる名詞性（ジェンダー）ではなく，それなりの制限はあるものの，話者が名詞的な対象を恣意的に類別し，その類別を動詞において標示する類の名詞類別であることを明らかにした。東アジアの言語に多い数詞への類別接頭辞の付加がスワントンなど古い時期の記述には認められるものの，現在のハイダ語では殆ど起こらないといった，おそらく一種の言語変化と見做し得る事実の指摘は，名詞類別の類型論にもまたその通時的解釈にもきわめて重要である。

このように本論文は，過去の記述における音声面と形態法の扱いの不十分を補いつつ，ハイダ語の形態法を詳述したものであり，以て1990年代におけるハイダ語の姿を正確に描きだした点に価値を認めることができる。もとより，例えば派生接尾辞の分類，名詞と動詞の区別についての言語学上の通念から逸脱した現象の扱いなど，資料的にも理論的にも追求不足の感を残すところがあるのは蔽うべくもない。しかし本論文は，先行研究の基礎となる調査がなされた時期に比べて，日常生活において英語を話す割合がますます増え，話者が最高齢層にかぎられ，全体として言語の活力が急速に衰微しつつある現状での調査に基づいている。調査に多くの制約があるのは，ひたすら消滅に近づきつつある言語の記述研究の宿命と言わざるをえない。しかしむしろそのような不利な条件のなかで，類型的にも重要な特徴が多々あるハイダ語の形態法に関して音声的にも信頼のおける包括的記述をまとめあげたことは積極的に評価すべきであろう。消滅との競争のなかで残された時間に可能なかぎり悉皆的な調査と記述を図るべく，今後の努力に寄せる期待は大きい。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年3月6日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問を行った結果，合格と認めた。